
あの時の雨の日のキオク

三カ月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの時の雨の日のキオク

【Nコード】

N8658Y

【作者名】

三力月

【あらすじ】

雨。その単語を聞く度に思い出される線香の臭いと悲しき現実。あれから5年の月日が経ち…俺は澤野目高校二年生となった。でもいくら月日が経とうが経たまいが俺には関係がなかった。何故ならば俺は不幸だから。

こんな俺にもはたして幸せなどくるのだろうか…？。

あの時の雨の日のキオク

―あの日の雨の感触が今でも忘れられない―

彼、あおやなぎそうた青柳総汰は両親を交通事故で亡くした。

それは偶然で神様は時に非情で…不慮な事故だった。

唯一の家族はただ一人当時9歳だった妹…二人はその後地獄のような苦しみを受けることになるのはまだ知らない…。

そして5年後、総汰は17歳の高校二年生、妹の美優みゆは中学二年生へとなったのだった…

そして総汰にとってこの年は新たな発見があることをまだしらないのであった。

雨の日は…

「雨が降る日は気持ちがい。い」

シトシトと降り続ける雨に俺、青柳総汰は傘もささずに家の近くに点在する公園の古ぼけたベンチに腰掛けた。

顔を空に向ける。

どよんとした空を眺めながら俺はポツリと呟いた。

「なあ…雨さんよ…俺という名の氷をとかしてくれないか…？」

俺の言葉が天に届いたのか、さっきまでの霧雨が嘘かのように今はザアザアと音を出しながら降り続けていた。

「いい子だ……」

静かに目を閉じる。

周りには雨の音以外なにも聞こえない。

このまま俺をとかして排水溝へとながしてくれ。なんておもいつつもゆっくりと目を開いた。

「ツクシュ！……」

季節は5月、春本番だが、雨の日は少しばかり肌寒い。

そんな俺を見て哀れんだ奴がいたのか、傘を差し伸べてきた。

成「よつ。総たん、風邪ひくぞ?」

「総たんっていうなよ…なるひと成人」

傘を差し伸べてきた奴は龍心たつしん成人。

昔からの悪友で親友だ。

綺麗な顔立ちでモテる男のはずなのだが…こいつ、かなりのオタクで俺も気持ち悪いと思うくらいに二次元をこよなく好きを通り越して愛している。

こんな出来ないイケメンがいるから…男子のレベルが下がるんだと勝手に持論する。

成「にやにや」。俺はその呼び方には愛着を持っているのにや。

「

「お前が猫語を使うとキモイからやめてくれ」

半笑い気味に成人に言つと彼はケラケラ笑いいつもの顔に戻った。

成「オッケー。なんか総、元気なかったからさあ…まあよかったよ!」

成人がこんなことを言つのは中々ない。とゆうことは相当俺は元気がなかったのだろう。

「ハハハ…ちょっと昔のことをさ…」

成「……………」

成人はぐつと暗い顔を浮かべ何か言いたげな顔を浮かべていた。

成「……なんで…総だけがいつも不幸なんだろうな…」

「……………」

つい昔のことを思い出してしまった。

その日は酷い土砂降りだった。

喪服を着た老若男女がすすり泣く姿や線香の匂いが鼻につく。
5年前、12歳だった俺はその時は頭の中が真っ白で何が起きたのかわからなかった。

そう、俺の両親が他界してしまったからだ。

原因は単なる事故死。歩道を渡っている際に信号無視した車にひかれた。

早かれ遅かれ、いつかは人間は死ぬ。
わかっているのに、目からは涙が一杯にたまっていた。

生活面では相手側が一生負担しその他諸々…。

でもまだ精神的に子供だった俺にはそんなことどうでもよかった。
ただただ目の前の現実から目を背けたかった。

「美優^{みゆ}…」

隣にいた妹は俺に抱きついたまま、顔を埋めていた。

当たり前だが、泣いている。なにせ、9歳だ、悲しい訳がないだろう。

俺のたった一人の肉親をギュッと抱きしめ、葬式が終わるまで涙をながしていたのだった。

妹を持つ兄の苦勞

「ハハハッ！そんな顔浮かべんなよ！過ぎたことはもういいんだよ」

自分が言った発言に後悔しつつ、どよんとした顔の成人をバシバシ叩く。

成「いて！いて！！。…まあ！お前が言うならいいけどさ」

にこりと成人は笑ってみせる。相変わらず本当にイケメンスマイルだ。

茶髪の髪が雨で若干濡れている所も俺が女だったら惚れているだろう。

成「そういや、みゅーちゃんは？今日は迎えに行く日だろ？」

みゅー。それは俺の妹の美優^{みゆ}のことで、呼んでいるうちにみゅーとなってしまった。

美優だつてそれなりに愛着がある…らしい。

「それなんだがなあ…この公園で待つててと言われたんだが…30分まつても来ないんだ。」

成「みゅーちゃんが待つててなんて言うのは珍しいな…まさか！？」

成人は不可解なポーズを決めた。

俺には考える人みたいになんか見えないが。

成「強姦魔に襲われて…あんな鬼畜プレイやこんな縛りプレイの仕打ちをつけているに違いない！…くっ…萌えるぜっ…」

「どこがだ。ってかお前、美優をそんな目でみてたのか…この変態。」

成「ナッシング！。俺は断じて変態ではない。ただみゅーちゃんのボディーに見とれただけで…」

「それを変態っていうんだ。このロリコン」

こいつとは会話が尽きない。何故ならばあっちが一方的にボケるからで、ツツコミ体質の俺は成人には絡みやすい。辛口を入れつつ、成人をいじるのが面白いとゆうわけだ。

まあこいつとは長い縁な訳で…包み隠さず話せる大親友…だと思う。

会話を一段落させて携帯を開くと美優を待ち続けて一時間がたっていた。

「げっ…もう5時か…」

「おいおい…あれから一時間ちよつとじゃないか、まさか本当に…」

「それはない。…ん…美優から電話だ…もしもし？」

電話に出ると物凄く心配していたような美優の声が耳に響いた。

美「もしもし…！？お兄ちゃん！。まだ帰ってこないのぉ！？今日は夕飯作り手伝ってくれるって言ったのに…！時間がないから

夕飯の材料買って来ちゃったんだよ！？この雨の中大変だったんだから！！！！』

携帯を耳から離しても聞こえるくらい美優が叫んでいる。しかし、公園でまっっているといったのは美優な訳で…。どちらかとゆうと大変なのはこっちの方である。てかあの後一人で俺を置いてスーパーに言ったのか…。

「いや。美優…お前、俺に公園で待っていると1時間半程前に言ったのだが…」

美「そんなこといっ………た。」

ずるつとこけそうになったが、美優は自分の言ったことはよく忘れるタイプで……馴れているから別に仕方ないが。

数秒の沈黙の後、携帯を耳から10 m離しても聞こえるくらいの音量で。

美「ああああ！！！！？！！？！ごめんなさい！！！！今迎えに
行くから待って！！！！？！%£\$全≠#○——！！！！」

ブツツ。と何を言っているのかわからないまま切れてしまったが、あの状態の美優からすると迎えにきてくれるのだろう。

「はあ……成人、そうゆうことだ。」

成「あ、ああ……十二分に理解した。」

そんなこんなで妹美優がこの公園まで来るまでに一分とかからない

速さできたのには正直ビビった俺なのだった。

幼なじみの異変

――

美優との約束（夕飯を一緒に作る）を達成し終えた俺は居間で美優の言葉を思い出してみた。

『お兄ちゃんを待たせちゃったから。今度何かお返しするねっ』

何故、陽気に話すのかよく分からないが、嫌な予感しかないのが実際の心境だ。

これまでもお返しといって返された試しがない。またこんなことになるのだろと思うとため息をつくばかりであった。

食べたたら人間眠くなるもの。そう思いながら一人自室へと向かう途中、玄関の呼び鈴がなった。

こんなときにだれですか…。

時刻は9時を回り10時になるかならないかの時間帯だった。

「どちらさまー」

「総たん……やあ」

こんな時間帯に誰かと思えば、俺の小さい頃からの幼なじみ流^{ながれ}かのもんだった。

流「こんな時間にごめんね。すぐ帰るから…んとね、これ良かったら食べて」

「これは…。プリンじゃないか？どうした？いきなり」

プリンは俺達家族の好物のデザートでもある。やはりプリンは表面にクリームを乗せるのが絶妙だな。

流「ママがプリンを作ってくれたから、その…おすそ分け…かな」
やはり持つべき物は幼なじみだな。ありがとう。

「ありがと、かのん。なんならプリン4つあることだし一緒に食べようぜ。」

しかし、かのんは不自然な笑顔を浮かべながら手を横にヒラヒラさせた。

流「い、いや大丈夫。それじゃ、またね!!」

「おい、かのんー」

俺の静止の言葉も聞かずそそくさと玄関から飛び出していった。
あいつ…なんか変だな。

俺が首を傾げながら体を回れ右するといつ降りてきたのかわからない、美優が袋をマジマジと見つめていた。

美「お兄ちゃん…!!それえ〜」 プリンじゃん…」

満面の笑みを見せつけられるとたぶらかそうにもたぶらかす気にもなれない。

ここは妹のノリに乗ってやるとするか。

「ああ〜プリンだ〜一緒に食うぞ」

美「うん」

何故か妹は昔からプリンをプリンと言う。まあ可愛いからよしとしよう。別に特別な感情で言った可愛いではない。

だが、一瞬だけ妹は笑みを崩し不適に笑った。

美「うふふ…お兄ちゃんにはあの女より私が似合ってる…」

「何か言ったか?美優?」

美「なんでもなあ〜い〜えへ〜」

何か言っていたのはわかったが内容までは聞き取れなかった。まあ、別段気にするようなことでもないだろう。

俺は呑気にプリンをペロリと平らげたのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8658y/>

あの時の雨の日のキオク

2011年12月1日21時57分発行